

海外交流研修を終えて

大中山小学校教諭 森武 史樹

渡米

成田空港を離陸！これから14時間という長いフライトだ。25年前、初めて渡米し留学した時のことが頭をよぎる。コンコードのホームステイはどんな感じなのだろう... 今回同行している生徒たちも同じように期待と不安を感じていることだろう... など25年前と同じように思いをめぐらしフライトを楽しんでいた。しかし、14時間は予想よりはるかに長い。みんな大丈夫だろうか？“ひたすら耐えている”が適切な表現のようだ！

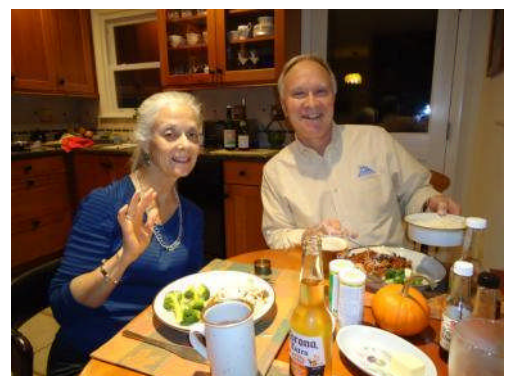
ようやくニューヨークの街並みが小さな窓から見えてくる、自由の女神も見えた。ここは22年前、ジュリアード音楽院受験の為に訪れた町だ。胸が熱くなる。着陸し機内から外に出ると、いつも西海岸やハワイで飛行機から降りるときにだけ感じる“あのアメリカの匂い”がしない！私がアメリカの匂いと思っていたのは、どうやら西海岸の匂いだったようだ。

ニューアーク空港はケネディー空港と違ってマイナーな空港だ。荷物を取ってセキュリティチェック。ここではニューヨークからボストンへの乗り換えチケットとパスポートが必要。みんなチケットをパスポートに挟んで待機。が、チェックポイントで中学生女子1人にトラブル発生。行ってみると「これはなんだ？ボストン行きのチケットは？」とクルー。挟んでいたのは函館 羽田間のチケットだった。一緒に探すがなかなか見つからない。「出てきてくれ～！」ここで出鼻を挫かれるとキツイ！祈るような気持ちで探した... あった！が、彼女だけ連れて行かれた。念密な荷物チェックのため。これもいい経験！

コンコード

ボストン空港では、お迎えが来ていた。黄色いスクールバスに乗ってコンコードへ向かった。照明ひとつない真っ暗なバスだ。30分ほどでコンコード・カーライル高校(CCHS)に到着。ダンディーノ先生のバンドルームでホストファミリーとの対面。緊張感と期待感が入り混じる瞬間だ。

私のホストファミリーはジョイス夫妻。ホストマザーのクリスは自宅でアートスクールをする芸術家で健康食派。ポニーテールの白髪でとてもオシャレな女性だ。ホストファーザーのビルは建築資材を扱う会社の社長さん。アイルランド系でステーキにバターをかけて食べるの



が大好きな美食家。そして地下室には見事な鉄道のコレクションがある。食事をしながらの話は尽きないが旅の疲れと翌日の早いスケジュールを気遣ってくれ、シャワーを浴びたあと、ベットに入る。が、眠れない。時差だ。結局、2時間の睡眠で学校に。

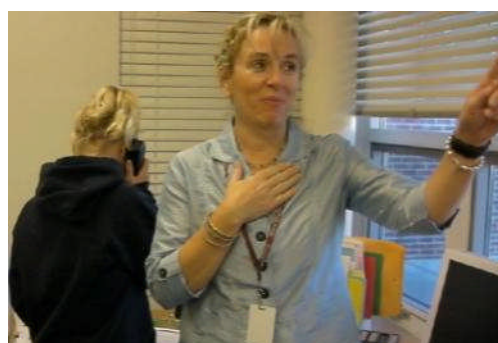
学校訪問

火曜日～金曜日の4日間、ソロー小学校、ウィラード小学校、コンコード・カーライル高校の公立学校3校を訪問した。通訳も付き添いもなく、まったくの単独だ。さすがに緊張する！毎日ホストマザーが送り迎えをしてくれた。ありがたい。

ソロー小学校

校長室にて

訪問のスケジュールを確認していると児童が全校の放送朝会の為に入ってきた。この学校の放送は受話器を使うらしい。朝会の最後は星条旗に向かっての誓約だ。ケリー校長先生が、右手は胸に置き誓約しながら、星条旗の場所を私に指さしてくれているのが右の写真。毎日、全校児童と全職員が同じように起立し星条旗に向かって誓約する。自由と夢を愛するアメリカらしい、誰もが納得できる内容の誓約だ。ここでは、たくさんのギフトも頂いた。



カーラ先生のクラス

アメリカでは通常級で特別支援の児童と一緒に学習する流れを“メインストリーム”という。教室に入るとカーラ先生がベンに「ベン、ミスタMに、みんなを紹介してくれない？」と促す。モリタケという名はベンには難しい。“ミスタ M”、こういう言い方はアメリカではよくある。(私の学生時代のアンダーソン教授もドクターAだった)紹介が終わると、次は「ベン、怒ったときはどうやって表現する？」写真「平和は？」写真「平和を分けましょう！」写真と、感情表現のジェスチャーを見せてくれた。



この日は日本からゲストがベンに会いに来たということで、ベンも絶好調のようだ。予定を変更して30分ほど他の活動を見せてくれた。「次の質問は何？ゲーム」写真 はベンが質問してボールを投げ、受け取った子が質

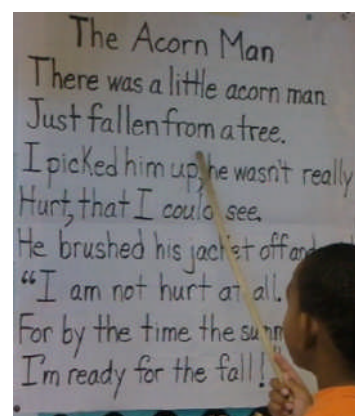
問に答える活動だ。ベンの質問は「好きなレストランは？」など。5年生には幼い活動だが子どもたちの表情はすごくいい。最後にカーラ先生がみんなに「ベンと一緒に学んで感じたことをミスタ Mに話してくれる？」



と問いかけた。ベンの成長ぶりを自分の手柄のように話してくれる子がいた。写真 また、「I never thought I can be as patient as I can be now ~」「自分がこんなに忍耐強くなれるなんて想像もしてなかった、自分の弟との関わりも変わった。」と自分の成長を話している児童もいた。写真 互いを尊重し合い、学び合う世界を作り上げているカーラ先生の力量を感じた貴重な訪問だ。

ペギー先生の特別支援教室

リーディング(読み)に困難性をもつ児童の個別指導。「エイ・アップル・ア、ビー・バット・ブ、シー・キャット・カッ...」写真 と読みの練習からスタート。(実際の発音はカタカナでは表記が困難)この読み練習は日本の英語教育にも取り入れたらよいと思うリスト・ナンバーワンだ。このメソッドを使い、毎回読んでいるショートストーリーを補助具の棒を使って音読している。写真 最後はゲームをしながらカードの音読。教師の専門性の高さを感じたと同時に専門性の高いスペシャリストが配置されているアメリカの教育の姿勢が垣間見られた。



その他、特別支援のベス先生と小川の畔でディスカッション、スー先生・カレン先生とランチ、トム先生のクラス、ローレル先生のクラスなどを訪問した。児童や先生方からたくさんのおみやげや手紙を頂いた。

ウィラード小学校

アメリカでは、スクールバスが停車して子どもたちが乗り降りする時、バスの前後についている赤信号が点滅する。この時には他の車は停車が義務付けられており、通過することはできない。子どもは不注意であることが前提の法律だ。



図書館教諭の授業参観

子どもたちが選んで読んだ図書の内容をプロジェクターで映しながらプレゼンテーションし、エリカ先生が撮影していた。図書室だけでなくすべての教室に、このような立派なスクリーンとプロジェクター、PCがそろっているのには驚いた。教育予算の桁の違いを感じる。



特別支援教室訪問

ここでも専門の先生が多いのに驚く。言語スペシャリスト、臨床心理士、理学療法士、作業療法士など。渡島では療育センターや医療機関にしかない専門家が配置されている。右の写真は書くことに困難性をもつ児童の学習の様子。



メインストリーム

通常級の一角で2人の児童が集中して学習に取り組んでいる。壁に囲まれていることで安心感を感じ、集中できるタイプの児童だ。課題の内容は他の子と同じ。写真には写っていないがこの児童担当教員もいる。



パトリシア校長先生と給食 & 学校ツアー

校長先生と給食。数種類の給食と持参の弁当から選べる。給食の場合はプリペイドカードを使用。給食後は校長先生による学校ツアー。昨年新築されたばかりのきれいな校舎。目に留まったのは、図工室。絵具や筆などの教材がすべてそろっており、児



童の忘れ物による生徒指導の必要がない環境だ。ここでもたくさんのギフトを頂く。

3年ジェニス級

日本についての質問を受け答えしているところ。ジェニス先生が写真を撮ってくれCDをわざわざ届けてくれた。

コンコード・カーライル高校 図書館にて会食

七飯訪問団の大人とコンコードの高校職員、校長先生、教育長さんなどと図書館の3階で会食。日本語英語両方話せる人がそれぞれのテーブルに必要とすることで、私は教育長、校長、七飯副町長と同席。が、みんな気さくで話しやすい。教育長と校長が州の教育担当者の愚痴を言っていたのを聞き、アメリカも日本も一緒なんだと感じた。

特別支援教室訪問



大きなスペースで生徒と教師がマンツーマンで学習。左の写真の生徒は会話をするための文字ボードがついた全自動の車いすに乗り、このPCを使って

コミュニケーションを取る。校舎はすべてバリアフリーでどこにでも自由に行ける。

弦楽オーケストラ&コンサートバンド

アメリカの高校では、オーケストラや吹奏楽はクラブではなく授業だ。この授業を受けるには音楽の基礎の授業や楽器の基礎の授業を履修し、さらにオーディションを受けて入れる仕組みになっている。だから楽譜の読めない生徒はいない。吹奏楽は初級バンドと上級バンドがあり、それぞれ100人近いメンバーがいた。弦楽オーケストラではちょうど役員選挙の日だった。生徒たちに選挙の正しい手順と進め方を確認しながら和気あい



あいと進めていた。予想していたよりも演奏のレベルが高かった。

パーティー

毎晩のようにどこかのホストファミリーの家でパーティーに招待され、ホストマザーと一緒に出かけた。皆大きな立派な家だ。いろいろな方と出会う楽しいひと時。その中で面白い出会いがあった。ジャネットだ。子供の時、日本に住んでいてペコちゃんのモデルだったという方だ。おじさんが有名な画家でその絵が元になり、ペコちゃんになったらしい。



それからCCHSでのピザ・パーティー。昨年までポットラックパーティーだったらしいが、公共の場で持ち寄りの食事での食中毒を懸念する意見があがり、オーダーしたピザになった。ここでは、ボビーが作成した「いか踊り」のDVDを見た後、みんなで踊り盛り上がった。

また、パーティーでは留学時代には学ばなかった言葉を一つ学んだ。「二日酔い」だ。英語ではハング・オーバーと言うそうだ。訪問団の1人が二日酔いを伝えようと電子辞書を調べて見せたら爆笑されたらしい！

自由時間



自由時間はホストマザーのクリスが私のしたいことをよく聞いてくれ、計画的に連れて行ってくれた。幸い趣味が合い話も盛り上がった。ボストン交響楽団の演奏会、コンコード管弦楽団の演奏会、生バンド演奏のあるお洒落なバー、教会、ショッピングなど。また、ホストファミリーのビルは、クリスが作った、と~ってもヘルシーな夕食のあと、「フミキ、アイスクリーム・サンデ食べにいこう！」と健康食派の奥さんの渋い顔を横目に見ながら、うれしそうに言っていた。子供のような笑顔が印象的だ。口数少ないビルだが、娘から電話が来ると別人のようにおしゃべりになる。素敵なお父さんだ！



出発

出発

短い訪問でも濃い時間を過ごしたこともあって、女生徒はほとんど別れを惜しんで泣いていた。あまり泣かないアメリカ人



だが、もらい泣きする大人もいた。現地の Junko さんが、交流の成功度はこの時の泣いている人数でわかると話していた。そういう意味では今回の交流はかなりの高得点だ。名残惜しいが出発の時間！ 見送られて観光バスで出発。

一週間のコンコードの手厚い歓迎は私にとって特別なものだった。通常、個人で米国を訪れ、このように町を挙げて歓迎を受けることはない。コンコードと七飯が姉妹町としてこれまで築いてきた交流の積み重ねの成果だ。この事業に参加できたことを本当にありがたく思った。そして自分は何を学び、何を伝えることができたのだろうか？ この交流の事業に自分はどのくらい貢献できるのだろうか？ 同行した生徒たちは何を受け止めたのだろうか？ など考えながらボストン到着だ。

ボストン

コンコードでは訪問団全員が一緒に行動することはなかったが、これからは一緒に行動だ。トリニティー教会、ハーバード大学、MIT、ボストン美術館などをさら～っと見学しホテルにチェックイン。その後、歩いてシーフード・レストランへ。帰りはスーパーでショッピング。子どもたちは本当によく値段をチェックしている、買い物は子どもたちの買うものを見ながら選んだ。



ここでは自分で会計をするマシンに初遭遇。買い物かごを左のテーブルに乗せ、商品をスキャンし右のかごに乗せる。全部終わって右と左の重さが同じであることを自動で感知して会計だ。なんでも自動にするアメリカらしいマシンだ。



ホテルはちょっと古かった。高校生3人の部屋の窓の取っ手が取れていて閉まらない。閉めに行くが取っ手なしでは無理だった。フロントに頼むと吸盤つきのツールをすぐに持ってきて閉めてくれた。この日の夜は、久しぶりに日本語でのトークだ。みんな集まって、コンコードと七飯の交流の在り方などについて盛り上がった。

翌日は、コンスティチューション号という船を見学、クインシーマーケ

ットでショッピング、そして、アムトラックという鉄道でニューヨークに向かった。

ニューヨーク

20数年まえのニューヨークより安全になった印象を受けるが、NYはNYだ。夜に生徒を引率して町を歩くには気が張る。また、ホテルからレストランまで歩いて移動だ。しかも、もうボストンではない。夜のNYだ。道は暗く、人が多い。大人で



生徒を取り囲むように歩いてはいたが、酔っ払いのホームレスが生徒の行く手を阻んだ時には焦った。列の最後尾でチェックしながら歩いていたので、すぐに間に入ってあげることができなかった。幸い怪我や紛失物はなかったがビックリさせてしまった。酔っ払いは目が合うと吸い込まれるように寄ってくるものだ。東京などで生活しているとわかると思うが、北海道人だ。その時は酔っ払いやホームレスの目を見ないように伝えた。

ホテルはボストンよりきれいだった。翌日は、自由の女神、グランド・ゼロ、エンパイアーステートビル、ハーレム、ナイキタウン、タイムズ・スクエアなどをさらっと見学。それにしてもバスの臭いのはやられた。いったい何を積んでいたんだ、この運転手！

みんなとせっかく仲良くなり始め、チームとしての一体感が出てきたところだが、もう帰国前日だ。なごり惜しい。食事時には「コンコードに帰りたい。」「CCHSに留学したい。」「白い米が食べたい。」「留学はしたいけど食事が無理。」などいろいろ



な声が聞かれた。

帰国

なごり惜しい気持ちでアメリカに別れを告げて出発。また、長いフライトだ。帰りの座席はみんなバラバラだ。疲労が重なった上にフライトの疲労が重なる。また忍耐の時間だ。

成田到着後はすぐバスに乗りし羽田に。羽田では少し時間があった。とにかく、みんな日本食が懐かしい。うどん、おにぎり、わかめなどを買って食べていた。が、生徒たちはアメリカンになっていた。空港のフロアでくつろいでいる。



やっと函館に到着。お迎えの方々もたくさん来ていた。簡単な挨拶があって解散。生徒たちは、翌日は休養日。うらやましい。が、先生は出勤だ！
おわりに

生徒たちにとってアメリカを知るにはあまりにも短い期間だった。が、言葉にはできない多くを吸収した研修だったと思う。ここで若い心に蒔かれた種がどのように育ち、どのようは花を咲かせるのかはわからない。想像するとワクワクする。

アメリカは自由と夢の国。本気の発言ではないと思うが食事が合わないことで留学を諦めるのは割に合わない気がする。たしかに食事は合わなかった。が、自分の思いを素直に伝えると道は開かれる。それがアメリカだ。思いを伝えれば、日本の米と炊飯器などの本物の日本食がコンコードのホストファミリーの家に喜びをもって登場するだろう。そして本物を提供できるようになったことを誇りに思ってくれるだろう。伝えないで留学を諦められることのほうが本人にとってもアメリカにとっても悲劇だと思う。味付けされていないハンバーガーに「ケチャップくれ」と言えば喜んでケチャップやマスタードをくれる。失礼ではない。誰の口にも合う味付けにできるように、味なしのハンバーガーが出てくるのだ。アメリカはオーダ

ーメイドの国でもある。

コンコードと七飯の若い心に国際人としての感覚が育ち、この研修でまかれた種が、世界で一つだけの花に成長することを期待して... The End